日義村の文化財　3

上の原遺跡

— 通常砂防事業に伴う発掘調査報告書 —

昭和52年度

長野県木曽建設事務所
長野県木曽郡日義村教育委員会

目　　次

はじめに …… 1
1. 遺　　跡 …… 2
2. 遺　　構 …… 3
3. 遺　　物 …… 4
4. まとめ …… 6

挿図目次

第1図　遺跡附近地形図…… 7
第2図　調査地附近地形図…… 8
第3図　土坑実測図…… 9
第4図　出土遺物実測図……10
第5図　上の原遺跡出土土器実測図……11
第6図　上の原遺跡出土土器実測図……12
第7図　上の原遺跡出土土器実測図……13
第8図　上の原遺跡出土土器拓本……14

図版目次

第1図　発掘調査風景……15
第2図　土　坑　1 ……16
第3図　土坑　2・3 ……17

はじめに

尻平沢川沿線下流の防災対策として，村長を始め日義村がかねてより国に要望していた砂防堰堤が築造されることになりました。

長野県木曽建設事務所では、昭和52年度通常砂防工事として工事用取付道路を造成することになりました。その取付道路は、国道19号線から尻平沢川の北岸に造成されることになりましたが、この部分は上の原遺跡にあたり、縄文時代前、中期と平安時代後期の遺跡として、村内では注目されるところです。そこで、日義村教育委員会では、木曽建設事務所、長野県教育委員会と連絡、協議をし、県教委文化課の現地指導を受けました。その結果、道路予定地のうち畑地にかかる部分を、木曽建設事務所からの委託をうけて日義村教育委員会が学術発掘調査することになりました。

調査場所は、遺跡地内でも山よりの部分で面積も狭いので、日義村文化財調査委員を主体にした調査団とし、調査団長に神村透氏、調査員に三沢弥、田中健治、長谷川悦夫氏として、他に山下生六、千村喜万男氏、上松中学校考古学クラブの協力を得て、夏休みに発掘調査を行ないました。

調査の結果は、土坑３、柱穴群１と少量の遺物でした。以前の調査では住居址が検出されていたので、その存在を予想していたがそれは検出されませんでした。このことは、住居址群が取付道路より更に川寄りにあるということがはっきりしました。内容面での成果は少なかったが、埋蔵文化財の保護という面では破壊するものが少なかったことと、遺跡の在り方がわかったという点では大きな成果であったと言えるでしょう。

発掘終了後も遺物の整理、実測とこの報告書作成にご尽力をいただいた神村透先生を始め、ご協力いただいた関係各位に深く感謝申し上げます。

昭和53年２月

日義村教育長　今　井　秀　夫

1. 遺　　跡

上の原遺跡は、長野県木曽郡日義村宮越に所在する。(第１図)

日義村は木曽川の上流部にあって、この附近は両側の山裾が断層崖となっておちこみ、その巾は約600ｍ、その間を北東から南西に流れている。両岸に２段の河成段丘を形成しているが、支流の関係で東側木曽山脈よりに段丘が発達している。宮越部落では、その段丘を切って尻平沢川が流れこんでいる。尻平沢川は段丘の上に小規模な扇状地を形成している。そこに遺跡があり、北岸が上の原遺跡、南岸がお玉の森遺跡であり、日義村内では有数の遺跡である。

上の原遺跡は南北600ｍ、東西は南で300ｍ、北で100ｍの台形状の部分で、その南半分に遺物散布が多い。段丘上面であるためほとんど畑か桑畑で、一部用水路をつくって水田が見られる。段丘の下には崖下に国鉄中央線が走り、さらに木曽川よりに中山道の宿場であった宮越がある。段丘上は国道19号線が横切っている。

今回調査した場所は、遺跡の南端の山よりの部分である(第２図)。尻平沢川扇状地の扇頂部の部分で、国道の東側の三角形状の部分になる。ここは最も遺物の散布の多いところで、戦後、日義小学校教諭であった丸山通人氏による調査では縄文時代中期の住居址と多量の遺物が確認されているが、記録がなくその詳細はわからない。その後、昭和36年に神村が調査し、縄文時代中期住居址と平安時代住居址をそれぞれ１軒確認している。こうしたこともあって、取付道路が遺構にかかることが予測された。取付道路は国道から山よりの農道を拡幅工事することになった。この部分は標高890ｍ、尻平沢川まで50ｍ、川との比高約５ｍである。

道路巾が約６ｍと狭いので、その中央に巾３ｍ、長さ42ｍのトレンチを設定し、山よりにはその南に３ｍ×６ｍ広げた。それを３ｍ四方に区分して１～16まで番号をつけた。山からの崩れがあって埋っているかと思って調査したが、浅く、耕土ですぐロームになっていた。そのため包含層は見られなかった。遺構は４・13・14区で土坑が、15・16区で柱穴が確認された。遺物はほとんどなく、わずかな土器片と石器であった。

2. 遺　　構

遺構は住居址の存在を予想していたが、道路が山よりであったためか、住居址はなく、土坑が3と柱穴が4確認されたのみである。国道からの拡幅で水田の土手をけずった時、その部分から石組カマドと白瓷片が検出され、平安時代の住居址をきっているのを確認した（第2図C）。第2図A・B・Dでは縄文時代中期の住居址を確認している。

土　坑　1　（第3図）

4区に検出され、ローム層を掘りこんだ長方形の土坑である。主軸方向NEの、南北に215cm、東西133cm、深さローム面から35cmの大きさである。内部は黒褐色土と人頭大の角礫が5個入り、北壁に近い中央には大きな打石斧がおかれていた。埋土上面の北半はロームまじりの黒褐色土で、南半は木炭と焼土が混じるロームで、埋めたあと火を焚いたようである。

土　坑　2　（第3図）

14区に検出され、ローム層を掘りこんだ円形の土坑である。長径100cm、短径85cmの円形に近い楕円で、ローム面からの深さ25cmで内部は黒褐色土で埋っていた。遺物はない。

土　坑　3　（第3図）

12・13区の境いに検出され、ローム面を掘りこんだ円形の土坑である。長径65cmの円形で、ローム面からの深さは7cmと浅い。ほぼ東西南北の4か所に直径6cm、深さ6～11cmの小柱穴が見られ、簡単な上屋があったのだろうか。遺物はない。

柱　　穴

15・16区にかけて発見され、深さ20～27cmの、20～30cmの1辺の長方形の柱穴が3個不規則に検出された。その柱穴にはさまれた内部に、わずかな焼土部が見られた。白瓷、土師器片がこの部分に集中して出土し、平安時代の遺構と思われる。

3. 遺　　物

調査で出土した遺物

今回の調査では縄文時代の遺物と平安時代の遺物が出土している。縄文時代の遺物は、前期後半諸磯式土器の小破片が２、打石鏃、スクレーパー、打石斧片がある。

土坑１からは、大形の短冊形打石斧の刃部（第４図４）が出土している。刃部を北に向け、わずかに土坑底から浮いている（中央で３cm)。その上部に角礫がのっていた。側縁にわずかに自然面をのこし、その側端に使用痕が見られる。大きな打割で整形は雑である。刃部には小打割が見られるが部厚く丸味をもっていて鋭くない。石質は頁岩のようである。

平安時代の遺物は白瓷椀５個体分、壺１個体分、土師器坏３個体分、甕３個体が出土しいずれも小破片である。器形のわかるのは３個体である（第４図)。

１は白瓷椀で口径13.7cm、底径7.4cm、高さ3.9cmの浅い椀である。わずかに腰がはって口縁へ開き、口端は肥厚くなり突出している。高台は高く八の字形に開く。つけ根部をヘラで押さえたのか凹線状に凹む。底はヘラケズリされている。器面には灰釉がつけがけされ、白く無光沢である。胎土は小石粒を含み砂っぽく、灰白色である。内面底部と高台端に使用ずれが見られる。

２は土師器坏で口径15.3cm、底部7.8cm、高さ4.4cmの大きさである。底部から直に開く器形で、外の器肌はあれているが、内面は黒色研磨されているが、黒色の炭化物が口端まで附着している。底は糸切底である。ロクロ整形で器表面がわずかに凹線状に凹む。胎土は小石粒を含み、黒褐色である。焼成は普通。

３は土師器甕で口径10.8cm、頸径10.2cm、胴径12cmと大きくない。胴上半に最大巾をもち、わずかに外反し、短かい口縁部で口端は丸い。ロクロ整形され、横ナデ調整が見られる。胎土には石粒を含み、色調は明褐色で焼成はよい。

以前出土した遺物

昭和36年の調査では何軒かの竪穴住居址を検出し、多量の土器を得ている。それらの遺物を見ると、縄文時代前期から中期のもので、特に勝坂式土器が多い。それらの土器片を神村が接合したところ、器形のわかるものが８個体できた。このことから、検出された住居址は勝坂期のもので、住居内に完形土器を廃棄していったものと思われる。器形のわかる土器と破片の中から、いくつかを参考までにのせる。

5図1　前期末の波状口縁をもつ小形の甕である。縄文を地文にし粘土紐をはりつけてその上部をヘラで刻んでいる。

5図2　中期勝坂期の小形鉢、刻目をつけた粘土紐隆帯で囲んだ口縁部の文様、隆帯と半割竹管による平行沈線で4区分された胴部文様、その中を沈線でうめている。

5図3　装飾の見事な深鉢形土器で、口縁の一か所に沈刻された文様をもつ把手がつき胴は上・下の二つの文様帯にわけられ、上半のそれは巾広の隆帯を半円状に連続させ、その上下に様々な文様が見事につく。下半は縦の縄文がうまっている。

6図1　台付浅鉢で、口縁に孔をもつ楕円状の把手がつく。腰部には上下を凹線で区切り、その中を陰刻して文様をつくっている。

6図2　深鉢で、無文の口縁帯部をもち、胴部にはこの時期特有の文様でうめられている。

6図3　大きな浅鉢で、口端に円環状の把手と山形状の把手がつく。口端は巾広で、そこに2本の沈線をはしらせ、それにはさまれた中央は、棒状器具で交互に刺突して波状文をつく、その両側はヘラで刻んでいる。内側は口縁にそって一段肥厚くなった部分があって、そこに半割竹管による平行沈線と交互刺突の波状文がある。

7図1　大形の深鉢で、波状口縁である。隆帯と刻目、楕円形状文、キャタピラ状文などが見られる。

7図2　大形の深鉢で、刻目のある突帯と沈線、長楕円形文、縄文が見られる。

8図1～4　縄文時代前期後半の縄文が施文された土器で、羽状縄文か又は粘土紐をつけておいて縄文をつけている。

8図5～10　前期後半の半割竹管文を全面につけた土器である。

8図11～14　同じ半割竹管文で連続押引結節文で、12・13は粘土紐の上を、14は竹管ではなくヘラで切っている。

8図15・16　縄文中期初頭と思われる土器で、部厚く赤褐色で土着の土器である。半割竹管で文様をつけている。

8図17　縄文を地文にして半割竹管で波状文をめぐらしている。口唇には縄文をつける。

8図18　半割竹管できれいにつけていて、中期初頭の土器である。

8図19　胎土、焼成とも異質で当地方の土器ではない。口縁をおりかえして口縁帯部をつくり、縄文を施文し、口縁帯部には更に列点文をつけている。西日本の土器である。

8図20　大きな波状口縁で、縄文を地文にし、隆帯のまわりを押引沈線丈で囲んでいる。

中期前半の土器である。

8図21　胎土に石英粉末を多量に含み、焼成は悪くもろい。太い半割竹管と沈線文でかざられており、1個体分出ている。勝坂期の土器であるが、日本海岸的な土器である。

8図22　波状口縁の土器で、口縁には2本の隆帯をつけ、それに大きな連続する爪形文をつけている。その下部は縄文を地文にして条線がついている。

破片は相当量出土しているが、整理分類はしていない。これらの土器から見て、上の原遺跡は、縄文時代前期後半から中期初頭、そして中頃と連続して居住されてきたことがわかる。そして一時中断して、平安時代後半に再び居住が見られるのである。

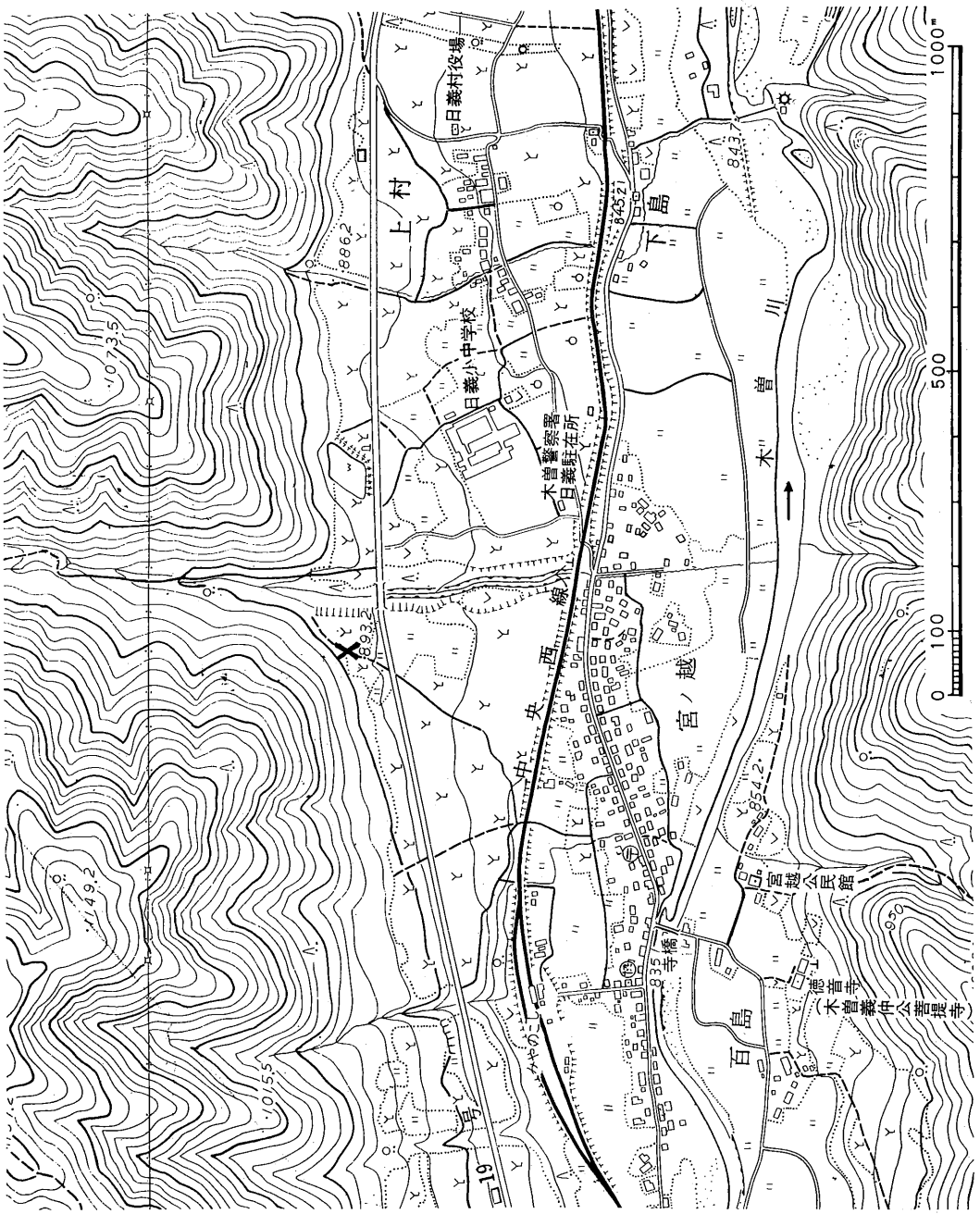
4. まとめ

上の原遺跡は、縄文時代前期後半から中期にかけての集落と、平安時代後半の集落が営まれていて、とくに縄文時代の集落は、尻平沢川にそって山よりに集中している。そのため今回の取付道路はその集落にかかると思ったが、工事道路が山麓よりであったため、集落の北はずれを通り、住居址にはあたらなかった。

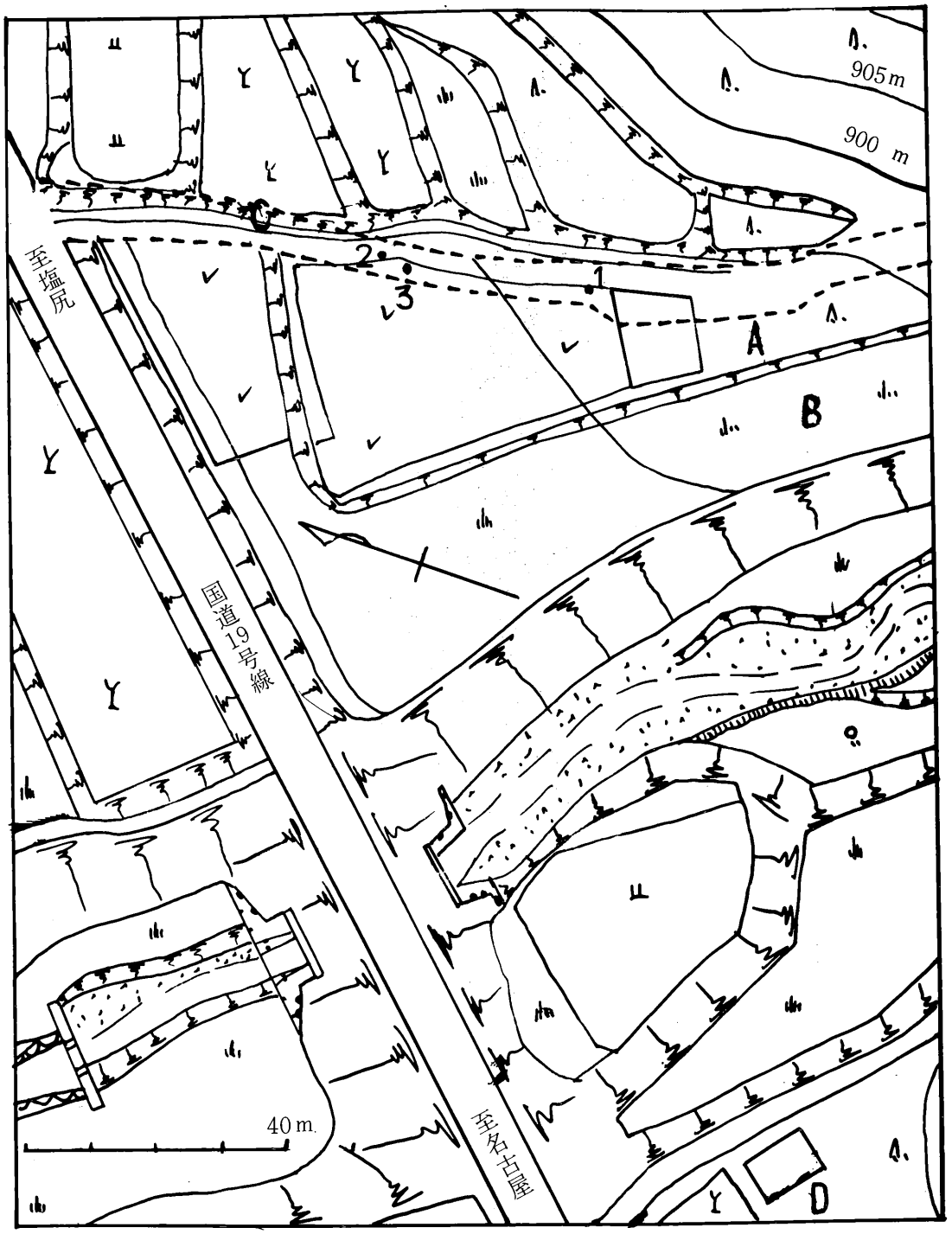
調査した範囲内では、縄文時代の土坑1と時期不明の土坑2があり、そして平安時代の柱穴の検出で、内容的には乏しかった。しかし、このことは破壊される遺構が少なかったということで幸いであった。

今までの調査でもわかるように、当遺跡は木曽谷においても注目される遺跡であるので学問的な必要でやむを得ず調査する時点まで、このまま大事にしておきたいものである。

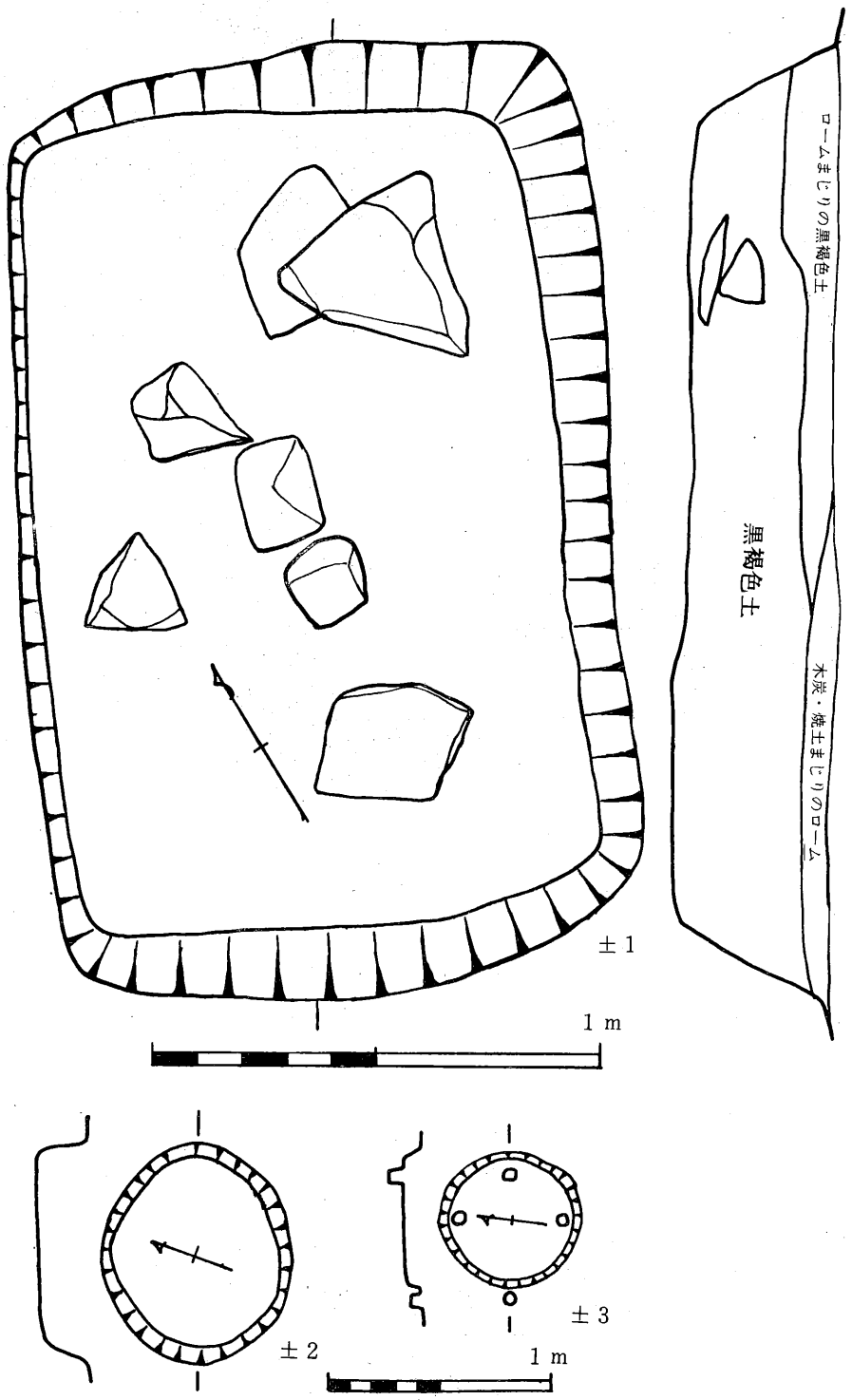
（文責　神村透）


日義村役場
上村
日義小中学校
木曽警察署
日義駐在所
中央西線
宮ノ越
下島
百島
木曽川
宮越公民館
徳音寺
（木曽義仲公菩提寺）
寺橋
19
0
100
500
1000m

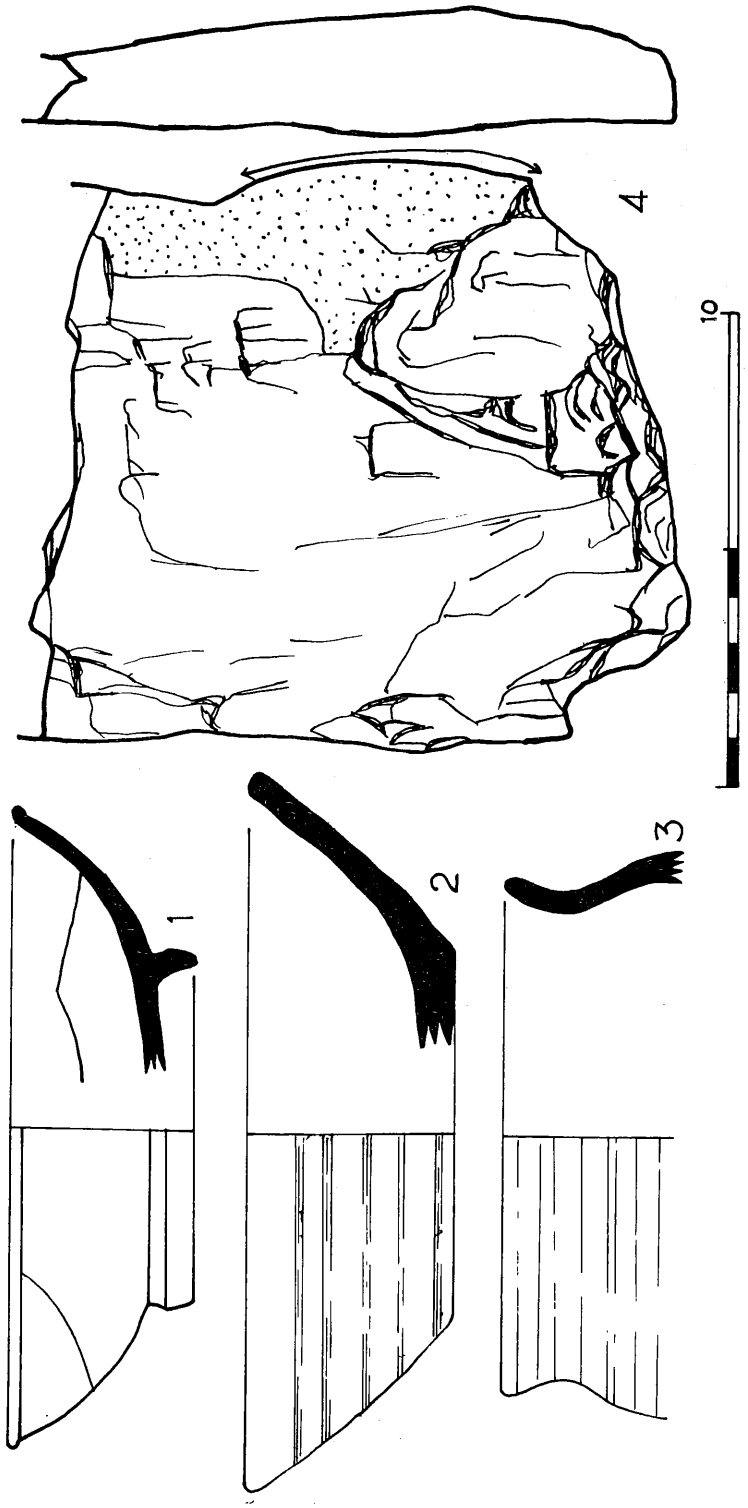
第１図　遺跡附近地形図



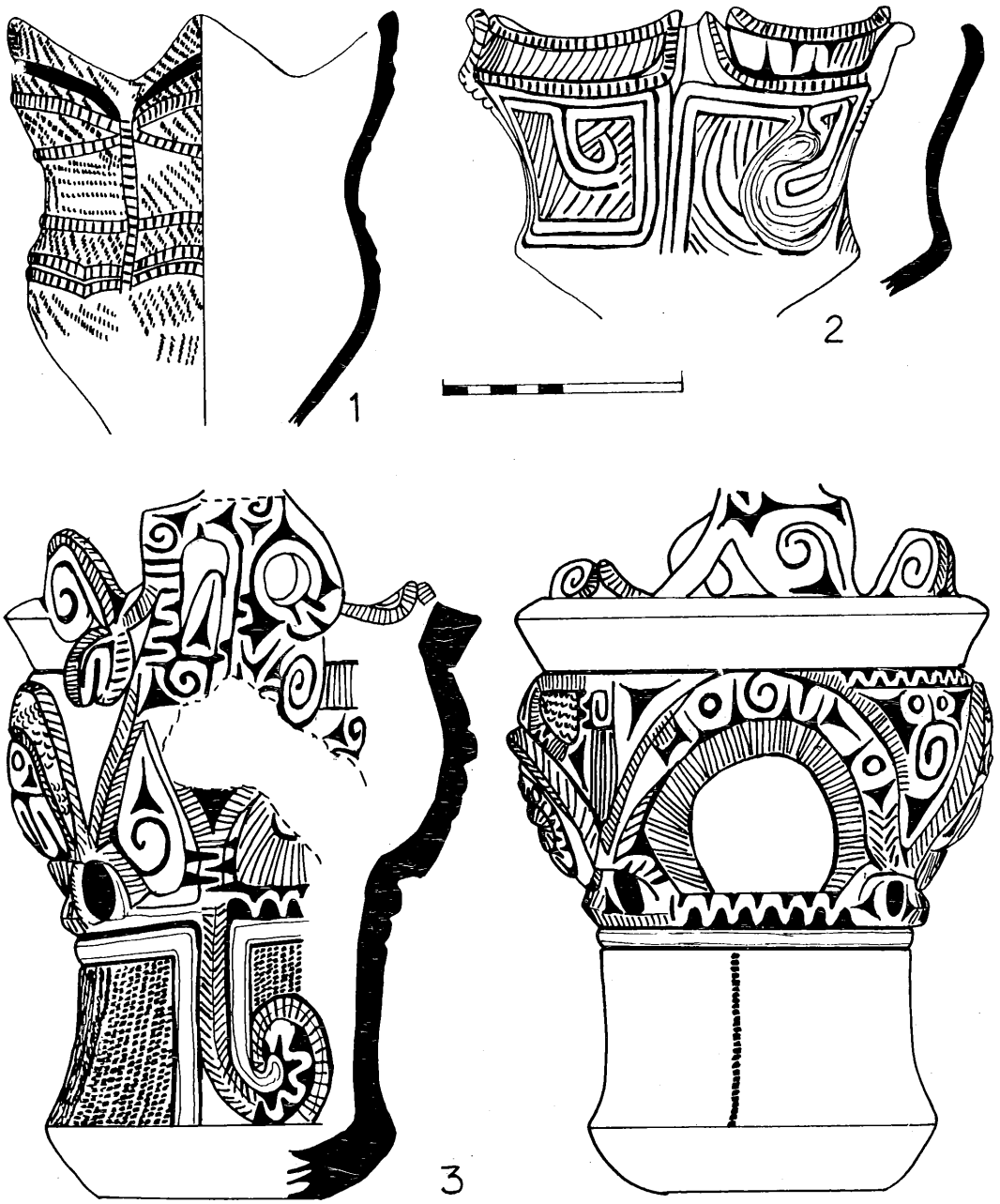
第2図　　調査地附近地形図



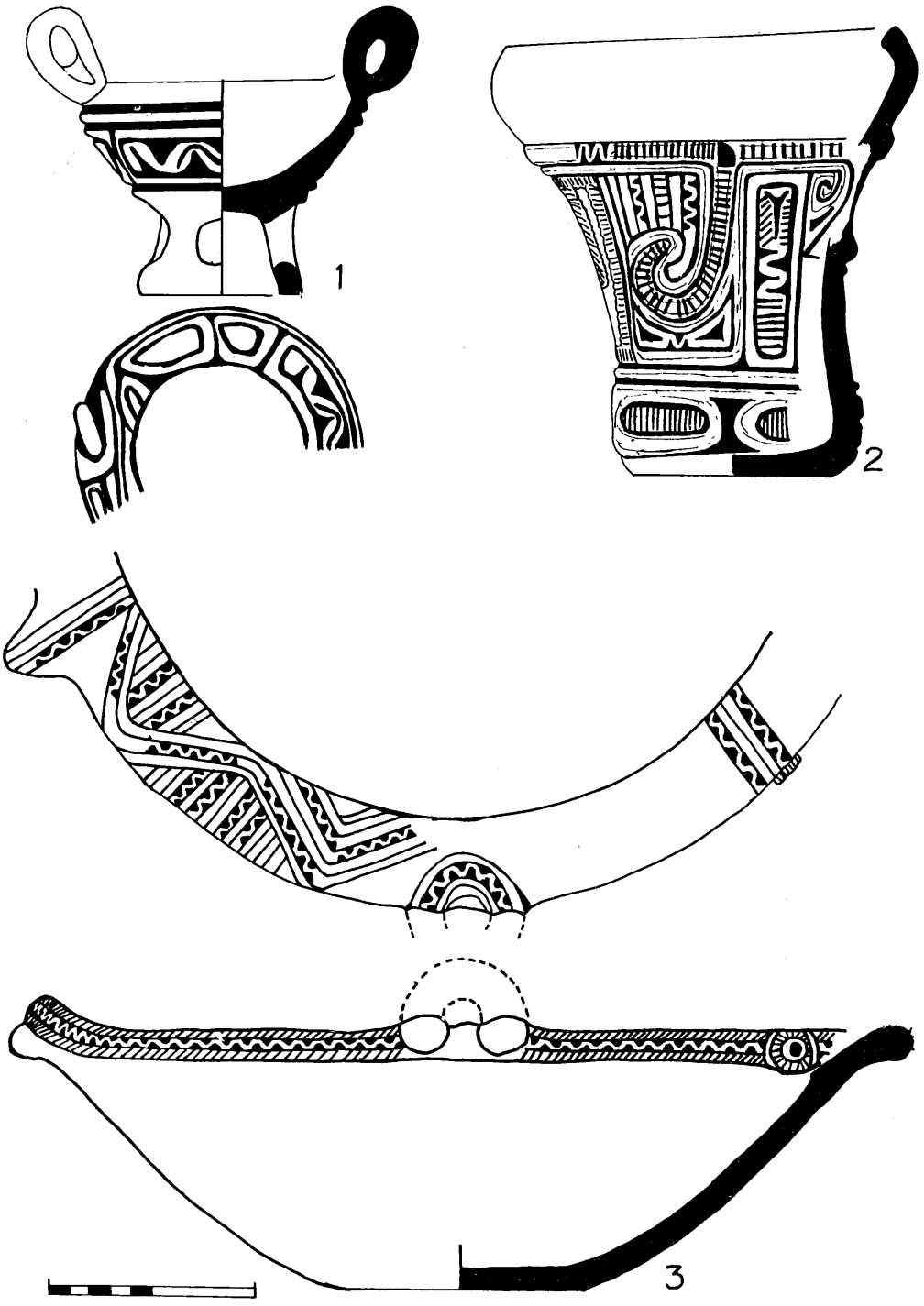
第3図　土坑実測図



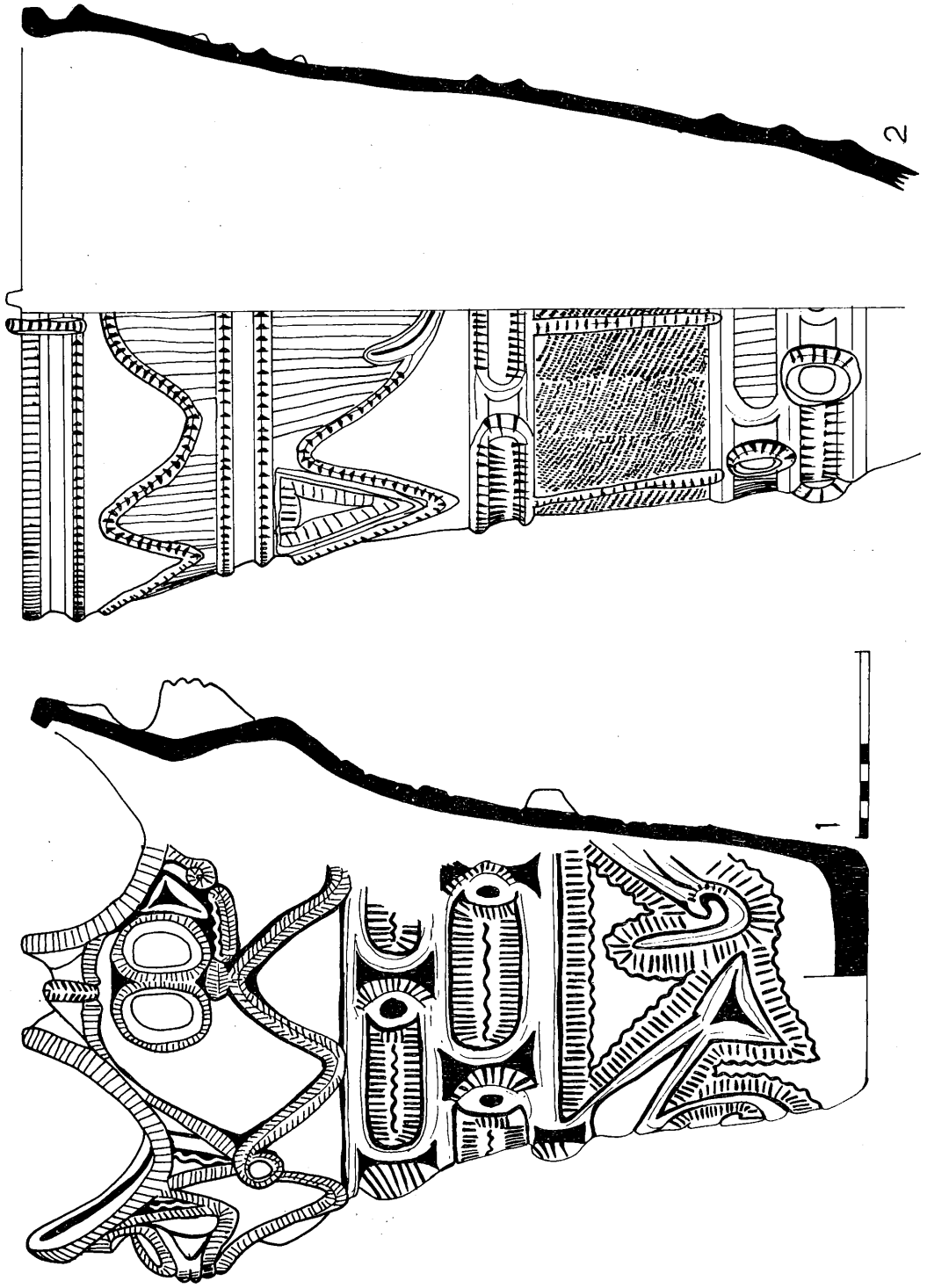
第4図　出土遺物実測図



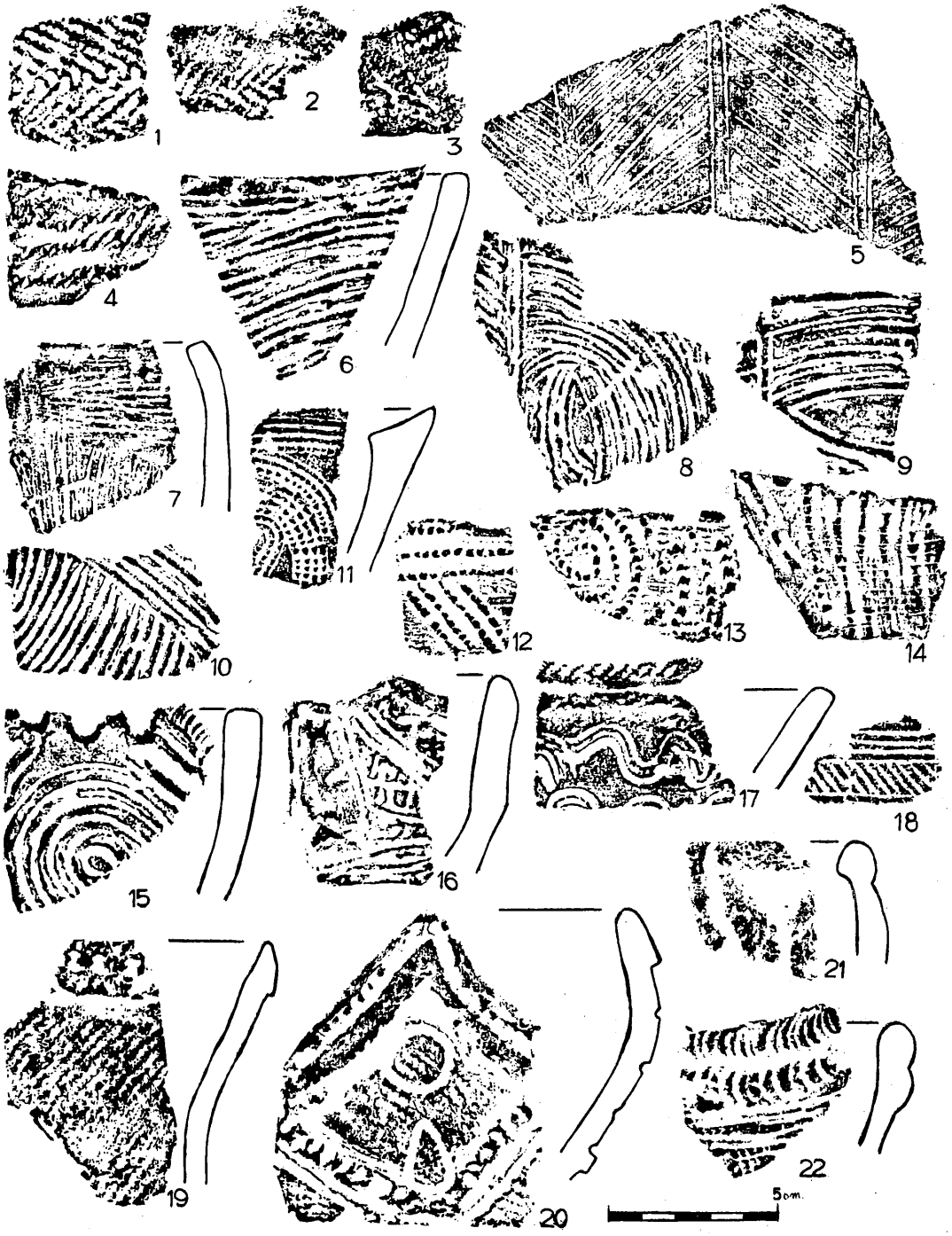
第5図　上の原遺跡出土土器実測図



第6図　上の原遺跡出土土器実測図



第７図　上の原遺跡出土土器実測図



第8図　上の原遺跡出土土器拓本

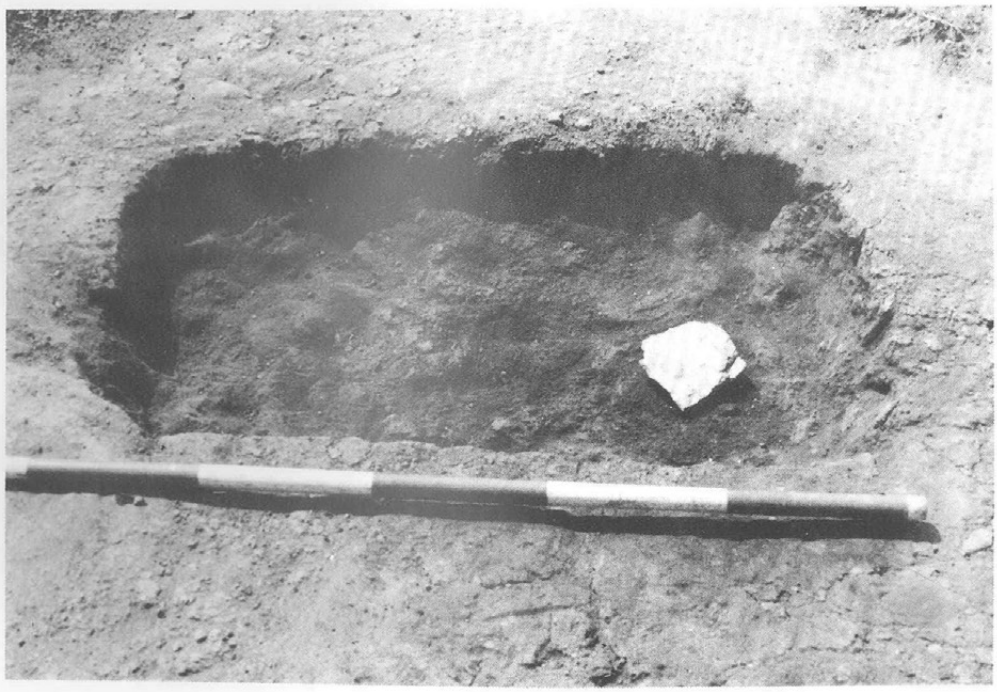
第一図

西より調査地

南より調査地区

第二図

土坑1



第三図

土　坑　2

土　坑　3

非売品

発　行　昭和53年２月20日

編　集　長野県木曽郡日義村
日義村教育委員会

印　刷　㈲安藤印刷☎(02642)2-2353